

ネットワーク VOA リスニング教材における中期学習の効果

大阪教育大学 吉田晴世 (hyoshida@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)
立命館大学 吉田信介 (syoshi@ss.ritsumeit.ac.jp)
広島国際大学 倉本充子 (a-kuramo@it.hirokoku-u.ac.jp)

1. はじめに

わが国の高等教育における EFL (英語を外国語とする) 分野のコンピュータ利用による学習形態は一般化してきており、種々の英語運用力を向上させるための学習ソフトが開発されてきている。筆者グループは、英語授業用の web ページを開設し学生のレベルとニーズに応じたオンライン教材を提供・実践している。その一部として、コンピュータの CGI 機能を活用して、VOA 教材を RealPlayer で再生できる .rm ファイルとともにシステムに載せて、インタラクティブ性を備えた「リスニング・オンライン・クローズテスト」として英語の授業にて訓練を実施した。ここでは、短期間における学習効果についてリスニングクローズ (部分書き取り) 能力に対する有効性が認められたが内容理解に関する聞き取り能力については課題を残した。

本稿では、通年受講者を対象に、3 ヶ月ごとの聞き取り能力の変化を測定し、中期的に行うことの有効性を 2 種類の 4 度にわたるテストから得られたデータをもとに報告する。

2. VOA - Voice of America の活用

VOA [http://www.voa.gov/] は、米国政府が外国向けに放送している国際ラジオ放送で、内容は米国中心である。そのプログラムのひとつ、VOA Special English は使用単語を基本 1,500 語に制限し、短く簡単な構文で、話すスピードを通常の約 2/3 に抑えており、内容・用語・標準米語の発話など、英語学習者がリスニング、リーディングの学習教材として使うのに恰好の英語情報であると捉えられる。

3. リスニング・オンライン・クローズテスト

大学内研究用サーバーに英語学習用 Web ページを構築し、リスニング・オンライン・クローズテストにより、CGI 機能を用いて、トランスクリプトに

空所を設けたクローズテストをコンピュータ画面に表示させ、自己ペースで音声ファイルを再生しながら空所補充し、音声も繰り返し再生させている。システム使用の意義として：1) 学習者への解答結果の即時フィードバックにより、得点や誤答の箇所を迅速に知ることができる、2) 学習記録データにより、誤答の分析およびその類型化を迅速かつ容易に行える、3) インターネット活用により、時と場所を選ばず学習できる、4) 英文を読みながら、音声を何度も聞くことで「繰り返し学習：リハーサル」の効果を得ることができ、ひいては「長期記憶に結びつく」ものであると予測される (御領、他：1995)。

4. システムの実践

大学 1 年生 2 グループ (実験群：80 名、統制群 76 名) を対象に 2003 年 4 月からの通年授業において実践した。リスニングの伸び率を測定するために、TOEIC リスニングテスト、リスニングクローズテストを、4 月、7 月、10 月、1 月の 4 回にわたり実施した。使用テキストは、両グループとも、「オンラインで学ぶ VOA イングリッシュ」(吉田、他、2002) で、実験群は PC 教室において、統制群は普通教室において授業を行った。

両群の学習法の違い (表 1 参照) は、実験群では、各ユニットのニュースを RealPlayer で個々人のペースで繰り返し再生して聞き、スクリプトが空所補充形式になっているので画面上の空所にタイプ入力していった。全問解答が済んだら、ENTER ボタンを押すことにより、正答率と解答パターンを取得した。教師は、サーバーに送られてきた解答をその場で処理分析し、誤答状況、各自のクラス内での順位も提示し、学習者にフィードバックした。

一方の統制群では、実験群のタスクに対応したユニットのテープ音声クラスに一齐に流され (3 回

繰り返す)学習者はスクリプトの空所補充部分を流れてくる音声を聞きながら、適語を書き込んだ。教師は、全員が終了した時点でスクリプトの空所部分の答えあわせをしながら、ニュース特有の表現などの解説を行った。

表1 両群の学習方法の比較

	再生方法	再生回数	フィードバック
実験群	ヘッドセット	セルフペース	即時
統制群	ルームスピーカー	固定	全員終了時

5. 結果

前後テストの平均と標準偏差を表2に示す。TOEICリスニングはTOEIC模試のリスニングの各セクションの一部ずつ(28点)を用いた。リスニングクローズテストは空所50箇所(50点)からなり、一斉に2度流したものを書き取った。

表2 群別の各リスニングテストの結果

回目	実験群(n=80)		統制群(n=76)	
	平均	S.D.	平均	S.D.
TOEICリスニング	12.10	2.72	12.39	3.60
2	12.24	3.28	12.63	3.89
3	12.99	3.41	11.80	3.35
4	14.06	3.54	12.49	4.33
リスニングクローズ	26.44	6.14	25.37	7.83
2	32.32	6.78	25.85	6.78
3	32.33	5.70	25.25	8.44
4	38.64	6.54	25.53	9.13

4回分のテスト結果は、図1, 2に示されている。

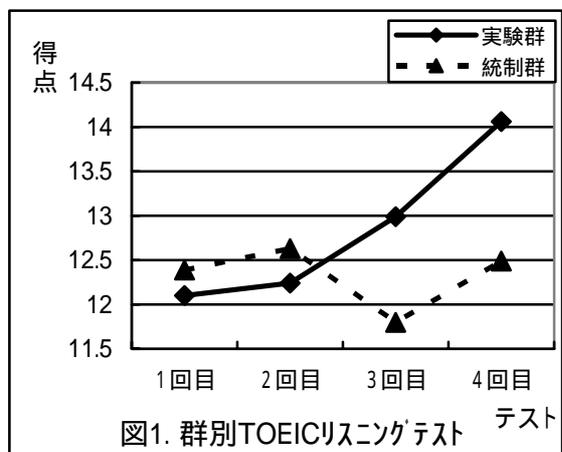
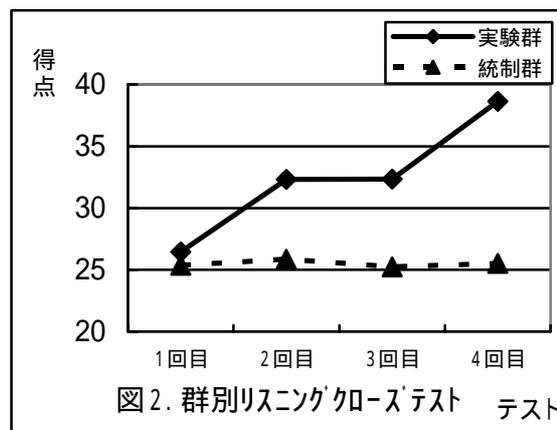


図1より、内容理解度の測定を目的とするTOEICリスニングにおいては、実験群の得点の伸

びが統制群よりも大きく、シェフェ検定により、実験群においては、1回目と4回目、2回目と4回目の間で有意差($p < .01$)があった。図2より、語句レベ



ルでの聞き取り能力の測定を目的とするリスニングクローズにおいても、実験群の得点の伸びが統制群よりも大きく、シェフェ検定により、実験群においては、1回目と2, 3, 4回目、2回目と4回目、3回目と4回目に有意差($p < .01$)があった。夏休みを挟む2回目と3回目以外では得点の伸び率が有意であることより、リスニングクローズについては、授業の影響を受けて得点変動するものと思われる。それ以外は、各回に有意な伸びがみられることより、継続性の有効性が示唆される。

6. おわりに

実験群における、両テストの伸びについてポイントとなるのは、RealPlayerメディアの特性である繰り返し可能な再生機能であろう。個々のペースで、納得いくまで繰り返し学習をし、音声を何度も聞き取りすることで、「繰り返し学習:リハーサル」の効果を得、これが得点の伸びに繋がり、自律的学習が確立したものと思われる(杉浦、他、2002)。今後、自律的学習を促す繰り返し学習が「長期記憶に結びつく」ものであるかを検証するための測定テストの開発を予定している。

参考文献

- 御領謙、他(1995).『最新認知心理学への招待』105-108. 東京:サイエンス社
- 杉浦正利、他(2002).「リスニング能力養成のための自律学習」『言語文化論集』XXIII-2:105-121.
- 吉田信介、吉田晴世、池田真生子(2002).『オンラインで学ぶVOAライフ系・サイエンス系総合英語』東京:松柏社